

古松談般若 幽鳥弄真如

こしょうほんにや だん けうちやうしんによ ろう
古松般若を談じ 幽鳥真如を弄す
(『人天眼目』)



はや、五月となりました。

日中は汗ばむほどの気温になり、見渡す山々の緑も一段と濃さを増し、滴るようなみずみずしい色合いを見せてくれています。

さて、今回の禅語です。

こしょうほんにや だん けうちやうしんによ ろう
古松般若を談じ 幽鳥真如を弄す

「古松」、苔むした松の老木が「般若」、つまり「仏の智慧」「悟りの智慧」のことを語らっている...

「幽鳥」、「幽」とは「幽か」ということ。鳥がそこにいることは鳴き声と気配でわかるのですが、姿が見えない様子です。どこからともなく聞こえてくる鳥の声が「真如」、つまり「真理」「物事の真実のあり方」、わたしたちが生きているこの世界の本当の姿を歌いあげている...

「悟りの世界」を説き、歌うのは、人間だけではない... 木も草も、鳥も獣も、風も、せせらぎも、雲も、大地も、みな仏の世界、悟りの世界の消息を語り、歌う... この禅語は、そう言います。これはいったい、どういうことなのか...

山に出掛け、野原に行き、森や林の中を歩く時、立ち止まって耳を澄ませれば、松の葉をわたる風の音が聞こえます。お喋りをやめて、耳を傾ければ、森のどこかで鳴き交わす鳥の音が聴こえます。何の不思議もない世界、何の特別なこともないありふれた風景 ... しかしわたしたちは、そんな身近な場所で、当たり前のように繰り返さ

れている出来事には、ほとんど注意を払いません。そして、鳥の鳴き声も、風にそよぐ木の葉のざわめきも、わたしたちが聴こうと思わなくては耳に入ってはこないのです。

美しい自然の音がわたしたちの耳に届かなくなったのは、何もわたしたちの住む生活環境が変わったからばかりではありません。わたしたちは、身近な自然の音に耳を傾けることを忘れてしまっていないか？

その一方で、都市の暮らしは騒音に取り囲まれています。人々の生活の喧噪けんそうだけではなく、駅でも商店街でも、どこでも、ひっきりなしに案内や宣伝の放送が流され、二四時間あらゆるところにBGMがかけてられています。

しかし、そうした騒々しく慌ただしい生活の中で、ときおり、フッと立ち止まり、自分の心の内を見つめる時がある。その時には、足を止め、お喋りしゃべを止めて、目を閉じて耳を澄ませます...

こしょうはんこしょうはんにや だん 古松般若を談じ 幽鳥真如ゆうちようしんを弄す

騒がしい外の世界ではなく、自分自身の心の奥底に向き合うとき、わたしたちの五感ごかんは、かえって生き生きと、鋭く敏感に働くようになります。そして、五感が研ぎ澄まされるとき、わたしたちの目も、耳も、鼻も、皮膚さえも、何気なしに見、聞き、受け流すだけでは決して気が付くことのできない世界のありようを、全身で感じ取ることができるのです...そして、この時はじめて、老いた松が何を語りかけているのか...鳥のさえずりが何を歌いあげているのか...聴き取る準備ができるのです。

はんはんにや だん 「般若」を談じると言うのも、「真如」を弄すると言うのも、結局それは自分自身のことなのです。人生の歩みの中で、本気で足を止め、耳を澄ませ、自分の心にしっかりと向き合う...わたしたちは、まず、そこからはじめなくてはならないのです。

